# NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.11【1】
2008〈秋〉

きのくに活性化センター
発行責任者／中田肇　発行日／2008年9月1日
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立 情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

## 祭りがダメになるとき、町もダメになる。古座河内祭でにぎわう町へ…。

河内様を御舟が回る

屋形船ツアー

祭りを楽しむ地元の人たち

華麗な平安絵巻を染め抜いたまん幕で飾られた３隻の御舟が、神が棲む小さな島「河内様」のまわりを回る。舳先で舵を取る白装束の神人、舟謡が声明のように響く。７月23日昼、古座川の伝統行事「河内祭」は、真夏の日が降りそそぐなかでクライマックスに達していた。神さびて、この世ならぬ光景であった。

河内祭は古座川流域の５地区によって担われてきた伝統行事である。林業と廻船で栄えた時代の面影をとどめる町・古座。「小さな町には大きすぎる」祭りは、まさに熊野の繁栄の証左でもある。だが、過疎化と高齢化、地域経済を支える漁業・林業の衰退は、「祭りそのものにたいする意識を変え」、地域の魅力は見過ごされがちだ。

今日、祭りを運営するのは、熊野水軍古座河内祭の夕べ実行委員会である。実行委員会には、勇進会、古座青年会、流域各地区などあらゆる団体が名を連ねる。区や漁業関係者を軸にしながらも幅広い住民主体の組織で担う。その要が委員長の上野一夫さんや神保圭志さんたち委員である。

屋形船ツアーは、ことしで４回目を迎えた。これは、地域外のひとたちに水上から河内祭を楽しみ、古座川の伝統文化を知ってもらう企画である。２隻の舟に乗った観光客らは古座港から約２キロをさかのぼり、河内様の前で繰り広げられる神事や櫂伝馬競争、獅子舞などを４時間余りにわたり見学する。参加型祭り観光ツアーで、その費用は弁当付きで3,000円、ことしは40人余りが参加した、50、60歳代の女性のすがたが目立つ。

上野さんらは八面六臂、ディレクターから裏方までをつとめる。なぜ、そこまで熱くなるのか。「祭りがダメになるとき、町もダメになる」、と上野さんは言う。危機感が、祭りを活かす町へと駆り立てている。

よい町の条件に、祭りをあげる人は多い。祭りがある町は、魅力的である。祭りは、その地域のコミュニティの質、人々のエネルギーや思いを語る。河内祭は、熊野の歴史と人々の魂の源流にと想像をかきたてる。河内祭が熊野にあることを、わたしたちはもっと誇りにしてもよいのではないか、と思う。

## CONTENTS

●祭りがダメになるとき、町もダメになる（串本町）　1 面
●きのくに活性化センター定期総会　2 面
●きのくに活性化センター・中田肇会長　インタビュー　3 面
●秋津野ガルテンの役割と期待　中田いくみ　4 面
●隠岐海士町の地域戦略　鈴木裕範　5 面
●祭りと地域（田辺市・那智勝浦町）　6 面
きのくに活性化センターの構成

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.11【2】
2008〈秋〉

# きのくに活性化センター「2008年度定期総会」を開催！

## 事業計画および予算を承認

2008年度定期総会

きのくに活性化センター2008年度定期総会は、7月5日、田辺商工会議所3階会議室（田辺市新屋敷町）で開催した。

総会には、会長の中田肇（田辺商工会議所会頭）、副会長の中家徹（紀南農協組合長）、自治体からは真砂充敏田辺市長、小出隆道上富田町長、奥田貢北山村村長らが出席し、2007年度事業実施報告と決算・監査報告が行われたあと、約434万円にのぼる今年度予算案と事業計画案が提案され、事務局案通り承認された。

きのくに活性化センターが今年度に取り組む主な事業は、つぎのとおりである。

## 2008 計画事業

**①「熊野地域検定」公式テキストの策定**

田辺商工会議所からの受託事業。熊野地域は、和歌山県を中心とする熊野とし、地域の歴史・文化・自然・産業・食文化・民俗・人物など各分野からまとめる。委員長は紀南文化財研究会事務局長濱岸宏一氏。2009年3月末作成へ。

**②田辺市・新地「席亭」に関する調査と記録**

田辺市の新地にある「席亭」は、お茶屋文化を育んできた。田辺市のもうひとつの「歴史」を映し出すお茶屋を聞き書きと映像で記録し、観光・街中活性化の資源としての可能性を検討する。

新地に掲げられた席亭の広告塔

**③フォーラム「川上不白が発信するもの」（仮題）および不白を偲ぶ茶会開催**

江戸時代に活躍した新宮市出身の茶人で江戸千家流祖川上不白を活かすまちづくりの提案事業。2007年度にきのくに活性化センターが企画・提案した「不白」関連事業。地元茶道関係者（表千家音無会）による茶会を支援。

**④那智勝浦町「よみがえれ、脇仲倶楽部」のまちづくり連携事業を支援**

住民が取り組んでいるまちづくりが本格化するなか、情報・知識の提供などの連携・協働活動を展開する。

**⑤田辺広域市町村圏健康・観光産業クラスター協議会への参画**

経済産業省の事業で作成した「田辺広域産業振興ビジョン・アクションプラン」事業の具体化に向けた事業に、和歌山大学と連携して参画する。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.11【3】
2008〈秋〉

# 紀南地方の現状ときのくに活性化センターの役割

## きのくに活性化センター・中田肇会長に聞く

―都市と地方の格差、そして地方の間における格差が、今日いたるところで問題になっているが、和歌山県、なかでも紀南地方がおかれている現状をどのように考えているか、お聞きしたい―

**中田**　グローバル化が進むなかで、格差は深刻化しているといってよい。勝ち組は関東エリアと中部地域。あとは、負け組だ。田辺もその負け組のなかに入っている。

田辺市を例に言えば、商店街はシャッター通りが目につく。郊外店に押されて、中心市街地が空洞化している。町のなかが過疎化、高齢化し、空洞化している。市街地の活性化は、喫緊の課題だ。田辺市全体をどうするか、という基本計画を今秋にまとめて、経済産業省に提出する予定になっているが、そのなかでは、市街地の空き店舗を利用した「まちづくり会社」の運営や駅前の再開発をも重要視していくことになる。

―地域の地場産業や商工業を取り巻く環境は、きびしい？―

**中田**　経済のグローバル化により、強いものが残り、弱いものが存在できない社会になっている。その傾向は、今後ますます広がっていくのではないか。また、原油価格や食糧の高騰が世界経済に及ぼす影響は大きい。石油中心の経済が、今日の状況を招いた。政府はいまだ抜本的解決策を示せずにおり、原油等の急騰は地域経済にもはね返り、消費者の生活を直撃し始めている。

―紀南地域の経済のけん引役であるウメ産業への影響は？―

**中田**　ウメ産業は、すぐにすたれることはない。日本人は基本的にウメの味が好きということができる。しかし、将来を考えると、人口が減少し高齢化が進むなかで、これ以上の伸びは期待できない。

―ブランドである和歌山県のウメであっても楽観できない？―

**中田**　そのとおりだ。

―明るい展望が描きにくい。そうであるからと拱手傍観するわけにはいかない。地域の活性化を図っていくには、どうすればよいと考えるか？―

**中田**　和歌山県は、半島という宿命的な問題がある。それは、紀南地域により顕著だ。土地はあるが、利用できる土地は少ない。企業誘致も難しい。半島で宿命的な問題がある。いま、各地で歴史や文化、伝統の掘り起こしが行われている。ひとつひとつ、埋もれたものを掘り起こし新たなものを創造する。地元の人が住みやすい地域をつくりあげていく、それが、地域の活性化につながっていく。結局は、ひとつひとつ積み上げていかないと、地域は変わりようがないのだと思う。

―いまの取り組みをブラッシュアップしていく必要は？―

**中田**　この地域で期待したいのは、文化産業、そして知的産業の創出だ。東京まで白浜空港からわずか１時間、この時間距離を活用することではないか。

―世界遺産は、東京・首都圏の住民にとっても近いところにあることをもっとPRする必要は？―

**中田**　紀南地域にとって、観光は重要だ。熊野古道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産に登録されてから５年目に入った。しかし、ここでもう一度考えてみる必要があるのではないか。熊野古道は、信仰の道であることが忘れられている。

四国八十八か所は、遍路が歩き信仰の道になっている。スペインのサンティアゴ・コンポステーラは信仰と結びつき、多くの人が歩いている。若者も多い、祈りの道になっている。熊野古道はどうだろうか。信仰の道であることが、忘れられている気がして仕方がない。

また、地元の人がそこに行かずして、なんのための観光か、と思う。地元の人が、地元のものを利用し、恩恵にあずかるべきだ。

―きのくに活性化センターが、2006年度にまとめた広域圏の産業振興ビジョンは、田辺、熊野の復権に、観光と健康、教育を柱に据えたが？―

**中田**　田辺市も文化に力を入れ、周辺地域にもそうした考えを広めていくのが使命、責任と思う。文化と知的産業は、最大の方針にすべきだとわたしは考えている。地域にあるいいものを伸ばす。住民が住んでよかったな、という郷土愛を持てるふるさとにする必要があるのではないか。

―きのくに活性化センターは、地域資源を掘り起こす重要性、文化を資源と位置づける取り組みの大切さを訴えてきたが？―

**中田**　昨年、川上不白の事業を展開したが、この前東京で江戸千家の茶会に出会う機会があった。場所も有名なところだが、盛会であるのが目を引いた。地元にいると、そうしたことになかなか気づかない。もっと、地域を知ることが大事だ。そうしたなかから、新しい取り組みも生まれてくる。

―新宮にまいた不白プロジェクトの種は、地元茶道関係者らが育ててくれる見通しにあるが？―

**中田**　ことしは、私も参加したいと思っている。

―きのくに活性化センターとして、地域で果たすべき役割がまだまだたくさんあると思うが？―

**中田**　きのくに活性化センターは、設立以来いろいろなことを、地域に投げかけてきた。会長をつとめるわたしがセンターを評価するのはどうかと考えるが、担うべき役割があると考えている。和歌山大学と地元の商工会議所、農協、自治体が一緒になって紀南地域の活性化に貢献する組織に重要な意味がある。活動の一層の活発化を、わたしとしてもセンターにうながしていきたい。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.11【4】
2008〈秋〉

# 豊かさを考える拠点として
## ～秋津野ガルテンの役割と期待～

きのくに活性化センター研究員
和歌山大学大学院経済学研究科 中田いくみ

都会では、豊かさが金銭の問題だけではないと気づいてから、スローライフ・スローフード・サスティナブル・循環・・・などといった言葉に人々は敏感に反応するようになった。こうした、田舎暮らし、農業体験などへの憧れを抱いた都会人と、農業者の高齢化や後継者不足、増え続ける荒廃地に頭を悩ませる農村とをマッチング・両者の問題を解決し、「農山村の活性化」を目的に旗揚げされたのが農家民宿や貸し農園などの都市農村交流、グリーンツーリズムである。

1992年、農水省によりグリーンツーリズムという言葉が使われ始めてから16年、独自の個性を打ち出したグリーンツーリズムが全国各地で安定し始めている。こうした中、田辺市上秋津においても、ドイツで盛んな貸し農園“クラインガルテン”にちなんだ「秋津野ガルテン計画」が立てられ、いよいよ今秋オープンする。

「秋津野ガルテン」では、貸し農園付き宿泊施設や、みかんの木オーナー制度、農業体験や農家レストランなど“農のある暮らし”を体感できるプログラムが用意されている。自分たちの地域づくりを行政にまかせっきりにしない上秋津の姿勢は全国的にも評価され、秋津野直売所「きてら」など様々なツールから発信されるこの地域の魅力にすでに多くのファンがついている。この流れの中で「秋津野ガルテン」に対する関心は高い。

では、この「秋津野ガルテン」はここに住む地域住民に何をもたらすのだろうか。

上秋津では、ほとんどの高校生が卒業したら進学や就職のためこの地を離れるという。ここ数年の小中学生の「将来なりたい職業ランキングベスト20」に「農業」はランキングされていない。私の周りにも大学を卒業して農業をしたいと言う友人はいなかった。しかし、都会に住みながら“農”を求める人たちは確実に増えている。なぜ彼らはここに来るのか、なぜ彼らにそのような欲求が生まれるのか。「秋津野ガルテン」はそこを訪れる人を通して、ここに住む子どもたちや、すでに故郷から都会に向かった人たちにそうした問いかけをもたらすだろう。

私はＩターンよりＵターンだと思う。Ｉターンが受け入れられ、都会に住んでいた人の感覚を持っても居心地が良いと感じ、暮らしていけると確信できる地域づくりは、いったん外に出た人たちを戻ってきやすくし、一度は外に出てみたい子どもたちの将来の選択肢と上秋津の未来を広げる。秋津野ガルテンを、都市農村交流の場としてのみならず、豊かさを考える象徴としてその役割を期待したい。

上秋津小学校を活用した秋津野ガルテン

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.11【5】
2008〈秋〉

列島フィールドワーク

# 辺境の離島は、なぜ人をひきつけてやまないか？

## ～隠岐海士町の地域戦略「島まるごとブランド化」～

和歌山大学経済学部
鈴木裕範

島根県松江市をフェリーで出港してから約3時間、海士町は、日本海に浮かぶ島影の美しい町である。熊野御幸28回を数える“熊野フリーク”後鳥羽上皇の配流の地である。

まちづくりの決意が菱浦港に

人口は約2,500人、高齢化率約40％。住民の暮らしを支えるのは四囲に広がる海と農業である。人口の減少・少子高齢化、過疎化の進行は激しい。その離島の町に、最近３年のあいだに43世帯、96人が新たに移り住んできた。圧倒的に多いのはＩターン者で、それだけでも驚きなのに、さらに驚くのは移住者の中心が、20歳代から40歳代の若い世代だということである。その理由を価値観の多様化、の一言で片づけられない。もっと明確な目的意識が、うかがえる。つまり、若者たちが、人生を賭けてみたくなるだけの魅力が、辺境の地にあることを意味している。隠岐の島の何が人をひきつけるのか―。

海士町が現在展開しているまちづくりは、2004年に策定した「島まるごとブランド化計画」が基になっている。目的に掲げるのは活力があるふるさとを「子や孫に伝え残す」こと。自立のための課題、それは「農林水産業と観光業のマッチングと島独自の個性化」「ＵＩターン希望者に応える働く場づくり」「第一次産業を基軸にした新分野への進出による地域雇用の増大」、「島ならではの資源の活用」等である。「島」を半島の和歌山県に置き換えれば、そのまま紀南地域の地域課題でもある。

ふるさと海士の産品販売所の店内

町が掲げたのは、島のあらゆる資源を掘り起こすことだった。農水産業は、町の基盤である。海士の自然が育む新鮮で美味しい食を生に近い味を保ったまま凍結する「ＣＡＳ」と呼ばれる農水産物加工凍結システムが導入された。イワガキやイカを都市の市場に運ぶことが可能になった。昔ながらの製法で作る天然塩の製塩施設を建設した。隠岐群島で生産されてきた肉牛「隠岐牛」のブランド化に着手した。町が構想するのは、海士町だからできるビジネスモデルの確立、名づけて「海士デパートメントストアー」プロジェクト。どこに売り込むのか、メインターゲットは東京だ。

隠岐牛のブランド化は、公共事業費の削減で経営環境が悪化するなかで「子牛を放牧・肥育」するだけの“畜産”に着眼した建設会社社長の異業種参入が始まりだった。イワガキの商品化は、地元漁業者とＩターンのダイビング愛好夫婦の共同事業を行政が後押しした。なまこ会社は、大学生の起業である。地域資源を再発掘し、磨くことで付加価値をつける。年間４万個を売るヒット商品となったレトルト製品「サザエカレー」は、４年間にわたる取り組みが生んだ。夕食を食べた小料理屋の女将は、サザエカレーを頬張るわたしに言った、「お客に出した最初はうちなの」。肉の代わりにサザエの身と肝を利用するカレーは、地元では常識の家庭食が商品になったのである。

モノづくりの動き、ビジネスの立ち上げが広がっている。第３セクターふるさと海士が運営する産品販売所には、地元の産物が並ぶ。年間の売り上げは約３千万円、客の８割は地元隠岐の住民だという。地元の食材にこだわったレストラン「セントラル亭」も人気だ。主役は女性たち、ＩターンもＵターンも若い女性もいる。

海士町の町づくりの特徴のひとつが、人と人をつなぐ取り組みにある。たとえば商品開発研修制度による研修生の受け入れや、都市・大学との交流制度である。交流が島に人材を呼び込み、外部の目、外部の感覚は、自分たちが気づかなかったことに気づかせる。「海士ファンの獲得」は、「交流と協働」の仕組みをつくり、根づかせつつある。

この町を訪れた人は港のキンニャモニャセンターに役場の中核があることに驚く。「答えは現場にある」との考えによる。エース級の幹部に、スタッフはＩターンや研修の青年たち。海士町のまちづくりの「熱さ」の象徴が、ここにある。「日本一働く職員」と強いリーダーシップを発揮する町長。この町はまず、行政が変わった。なぜ、人をひきつけるのかという冒頭の問いへの答えはそこにある。やりたいことを実現できる可能性がここにある。総務省は今春、地域づくり大賞に海士町の取り組みを選んだ。

隠岐の海の香がするワカメ

日本海の離島が発信するのは、「どのようにして生き残るか」、瀬戸際に立つ地方の課題であり、挑戦である。自立の一方で問うているのは、この国のあり方である。

海士町の情報発信・交流の拠点「キンニャモニャセンター」

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.11【6】
2008〈秋〉

# 祭りと地域

## コミュニテイの確かさを伝えて　ぎおんさんの夜見世

あんどんは新庄中学校の生徒が制作

夜見世で名高い田辺市新庄町の「ぎおんさん」は、名喜里地区にある大潟神社にまつられている祇園社のこと。夜見世は夏の祭礼の宵宮行事で、ことしも7月13日に行われた。

名喜里橋に掲げられたちょうちん。そこから神社下までつづく旧街道約400メートル沿いにある約40戸の民家の軒先や屋台に出し物が並ぶ。材料は、主に旬の野菜や果物、草花で、そのほか“わが家の宝”もある。民家の開け放たれた玄関には屏風や衝立てが立てられ、その前に出し物を飾る。

日が落ちて宵闇に包まれる夜8時ころ、ぎおんさんへの道はさんざめく。浴衣姿の娘や親子連れが民家の玄関先を順番に回り、夜見世を楽しむ。造形のアイディアと技が見物客を驚かせる。打ち水をした玄関先、花生けの季節の花が涼を誘う、家人の心配りがうかがえてほのぼのとした気分にさせる。町内会長の森下松次郎さんは、「そうでしょう」と住民同士の結びつきを自慢する。

西瓜と茄子の篤姫人形

タマネギの皮で作られたエビ

無形民俗文化財に指定されている名喜里の「ぎおんさん」。しかし、街中のここでも人口減と高齢化が進み、近年は空き家や空き地もみられる。森下さんは「伝統行事を引き継ぐには、盛りあげが大事。保存会を立ち上げ、祭りの大切さを伝えていきたい」と言う。

## びん玉が揺れる町並み　コミュニティ再生をめざして

7月7日夜、那智勝浦町仲ノ町で、民家の軒先や沿道にびん玉あんどんの灯りが、いくつも揺らめき、地元の人や観光客らが灯りの世界がつくりだす情緒を味わった。

これは、衰退した町並みににぎわいを取り戻す取り組みを展開している住民組織「よみがえれ脇仲倶楽部（藤原睦展会長）」が、全国的に行われたライトダウンキャンペーンにあわせて企画した。昭和30年代の町屋がところどころに残る仲ノ町は、古い時代の港町の面影を残す地区。

びん玉を灯した店さき

倶楽部では、港町らしさを語るものとして漁具の浮きで、ガラス製の玉を網で編み上げたびん玉を地域資源として活用することにし、地域内外に呼びかけて集めた。そして、試行錯誤をしながら球に穴をあけて、そのなかにろうそくや電池、ダイオードの灯りをともすことに成功した。今回は住民手づくりの事業の最初の具体化で、住民たちによって夜7時7分、35個のびん玉に灯りがともされた。

夕暮れの仲ノ町の通りで

びん玉が幻想的な青白い灯り投げかけるなか、和歌山県職員田堀国浩さんのハーモニカ演奏や元マグロ漁船船主立木吉也さんが玉網の作り方を実演し、小さなにぎわいが生まれた。

仲ノ町のまちづくりは、きのくに活性化センターや和歌山大学経済学部学生も連携して昨年夏から取り組みが始まり、よみがえれ脇仲倶楽部には地元住民の約8割が加入しているという。そうした住民の行動は行政を動かし、町や和歌山県も支援に乗り出すなど広がりをみせ始めている。この秋にも、地区内に空き家を利用した情報発信・交流施設が整備される。

## きのくに活性化センターの構成

**きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。**（2008年5月1日現在）

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学

## 編集後記

古座川の河内祭に欠かせないものに、かしわずしがある。かしわずしはシビに牛蒡や人参、豆、高野豆腐などを入れて炊いたおまぜをおにぎりにして、アカメガシワの葉で包んだものである。

アカメガシワは紀南地方の河川の流域や里山に自生する木で、葉は標準的な大きさのわたしの掌（？）よりひと回り大きく、やわらかな緑色をしている。米粒がつかず、香りのよいのが特徴である。また、防腐効果もある。古座河内祭の祭りずしは、これですしを作る。

古座川町高池で4代つづく老舗旅館山﨑屋の女将・美知子さんは、おまぜをにぎるときに、「手酢のなかに柚子の小さな青い実を搾った汁を落とす」。爽やかな香りが、元気づけるからと言う。すしは具も味付けも家ごとに異なる。しかし、かしわずしが「祭りの思い出とともに伝えるふるさとの味」であり、母の思いがにぎられた味であることは同じである。

ああ、やはり熊野は魅力的だ。熊野を歩く人だけが出合える、祝いずしがある。（ひ）